

赤ちゃんは「おはよう」が好き

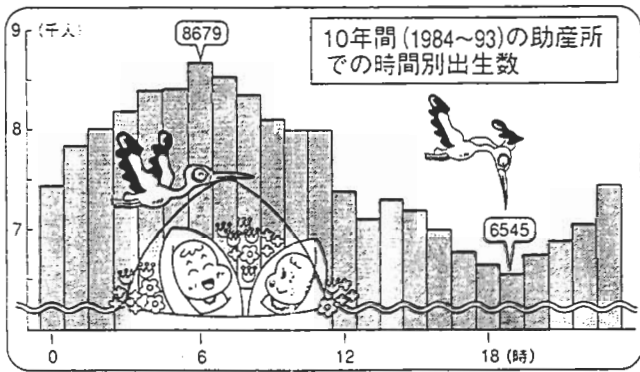
京都の高校教師 勝村さんがグラフに

赤ちゃんは明け方に生まれることが多い。京都府相楽郡木津町の高校教師、勝村久司さん（57）が、厚生省に報告された十年間の出生データを取り寄せ、一時間ごとの出生数に分類してグラフにした。そうすると、出生数のピークは午前六時から七時で、最低は午後七時から八時だった。

しか
も、きれいな波形の正弦曲線を描いている。赤ちゃんの誕生は「潮の干満に関係がある」と、その主張がある。潮の干満は、月が関与するが、このグラフからは、どうも太陽が影響しているようだ。専門家の意見を聞きながら、赤ちゃんはどんな時に産まれているのかを考えてみた。（梶川 伸）



赤ちゃんが生まれたのはいつ？（記事と写真は関係ありません）＝円内は勝村さん



誕生に太陽が影響？

データのうづ、助産所での出生だけをまとめた。助産所ではほとんどが普通出産。陣痛促進剤など人為的な方法に頼ることはあまりないとみられ、本来の出産時刻がわかると考えられた。助産所で十年間に生まれた赤ちゃんは約十八万人。出生数の最も多い時間帯は、午前六時台の八千六百七十九人。数は夕方に向けて下がり続け、午後七時台が六千五百四十五人で最低になる。その後、早朝にかけて再び増加していく。最大と最低の差は、二千人以上。満ち潮の時に多く生まれる

ラン化する時に相殺した愛知県の産婦人科医、山田哲男さん（68）は、太陽との関係に思いをはせる。山田医師は「出産は赤ちゃんが決める。おなかから出たときに、母親の脊髄を刺激する。その刺激が脳に行き、脳下垂体からオキシトシンというホルモンを分泌し、子宮の収縮によって赤ちゃんが生まれる。出産の仕組みを説明する。どんな時、赤ちゃんと生まれたかを決めるかは、わかっている。山田医師は「これまでの経験から、満ち潮の時に多く生まれる

普通出産

勝村さん夫婦は、「陣痛促進剤のために子供が死亡した」として、病院を相手として損害賠償請求訴訟を起している。陣痛促進剤は、強制的に出産させるため、時間ごとの出産数も特異なカーブを描く。それは、自然の出産だとどうか。それを調べるのが、グラフを作った目的だった。厚生省に報告があった一九八四年から十年間の出生

上も開いていた。また、同じ期間の病院と診療所についてグラフ化した。午後二時台がピークとなり、昼間が多く、夜が少ない曲線で、助産所での出生数とは際立った違いを見せた。勝村さんは「病院や診療所では、医師の都合に合わせて、陣痛促進剤で出産時間を調整しているため」と話す。

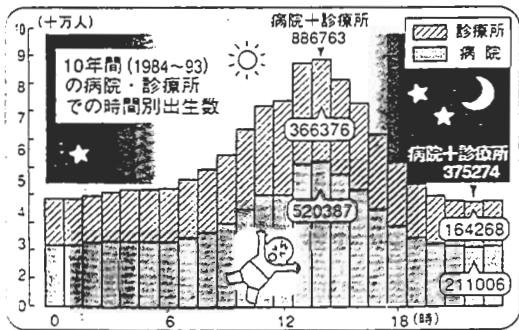
そうすると、生命の神秘を探る時に参考になるのは、勝村さんの出生数の美しきカーブ。勝村さんが「後藤さんは自宅で出産

ピーク 午前6時—7時

る」との印象を持っていた。しかし勝村さんが作ったグラフからは、太陽との関係を感ずるという。「地球自体が太陽の大きな影響を受けている。朝、太陽とともに生命が誕生するというのは、確信ではあるが、考えられる。医学では分折できない力が働いているのだ」と話す。

では、実際に出産に携わる助産婦はどうみるか。大阪市天王寺区善ヶ崎町、後藤アヤノさん（68）に聞いた。後藤さんは自宅でも

との関係も否定しない。自らの法則に従っていることは確か」と語る。お茶の水女子大理学部、藤原正彦教授（数学）は「藤原正彦教授は、月の満ち欠けと出生数の関係の研究ではないが、満月や新月の前後は出生数が多くなった」という。この研究



干満と関係づける説は、このグラフから言えなくなる。理由は、なぞだ。果た、初産面白い結果だ。初産と経産婦に分けるなど、詳しく調べたいのである。いかに「心」の関心を示している。

1995年 5月27日

毎日新聞 9刊